

2017年8月27日(日)朝10:10  
8月第4公同主日礼拝式説教

主の聖靈降臨節第13、自由交歎会等  
日本アライアンス庄原基督教會

## 説教題：7つの金の鉢；第7の金の鉢： 獸に乗る大淫婦

聖書：ヨハネの黙示録 17章1～6節a

＜口語訳＞

新約聖書402頁

ヨハネの黙示録 17章1～6節a

＜新共同訳＞

新約聖書471頁

ヨハネの黙示録 17章1～6節a

＜新改訳第3版＞

新約聖書494～495頁

ヨヘネの黙示録17章1～6節a

＜塚本訳＞

新約聖書811～812頁

主題：主イエス様から賜った聖靈の導き

によって主の弟子たちは、主の名による  
神の罪からの救いを宣べ伝えたように、  
私たちも、福音を伝えたい。

## 序論；

- ◆ヨハネの黙示録は、1章1節、「イエス・キリストの黙示」とありますように、神の御子イエス・キリスト様が、天使を通して(1)、長老・使徒ヨハネに与えた「神の国到来の奥義」の黙示で、ローマ皇帝ドミティアヌス(81～96)時代に記録されたものと理解されています。
- ◆ヨハネ黙示録1章は、御子の再臨信仰と愛、2章～3章は、7つの教会への手紙、4～5章は、羔羊礼拝と大讃美、6～13章は、聖徒の戦い、天使と龍(悪魔・サタン)、獣との戦い、14章は、小羊への大讃美、神無視の人々への裁きと信仰者への忍耐の求め、15章は、金の怒りの鉢による神の裁き序曲、16章は、金の鉢の用意命令、腫物、血海、血水、太陽炎焼、獣の座の暗黒による裁き、ハルマゲドンでの龍(悪魔・サタン)、第1、第2の獣と主なる神との最終決戦、バビロンの滅亡預言です。
- ◆ヨハネの黙示録17章1～6節aも、第7の金の鉢の注ぎで、バビロン・大淫婦への神の裁きの理由描写で、大淫婦の神なき生活と地の権力者との結びつきが描かれる。

本論；

◇本日、ヨハネ黙示録第17章1～6節aから主の使信に思い・心をとめます。

◆默示録17章1～6節a；ヨハネは、大淫婦・バビロンが神になぜ裁かれるのかを示す大淫婦の神なき生活を見ます。

◇17:1～6a；塚本訳◆第七金の鉢—獸に乗れる大淫婦の異象

「1 すると(神の憤怒の盛られた)七つの鉢を持つ七人の天使の一人が来て、私に語って言うた、「さあ(此処に来い)、多くの水の上に坐っている大淫婦の審判(の異象)を(今から)お前に示そう。

2 地の王達は(皆)彼女と淫行をなし、地に住む者は彼女の淫行の葡萄酒に酔っぱらった。」

3 そして彼は私を霊にて荒野に連れて行った。私は(其処で一人の)女が、(神を)流す名にて(全身を)蔽われた、七つの頭と十の角のある緋色の獸に乗っているのを見た。

4 その女は紫と緋の衣を着、金と宝石と真珠とにて(身を)飾り、手に嫌悪るべきものと

彼女の淫行の穢れとの一杯入った金の酒杯を持っていた。

5 そしてその額には(こういう)一つの名、すなわち奥義が書きつけてあった、「大バビロン、淫婦らと地の嫌悪むべきものとの母！」

6a また私はその女が聖徒の(流した)血とイエスの証人達の血とに酔っぱらっているのを見た」と、ヨハネは、大バビロン・大淫婦への神の裁きと大淫婦の神なき生活を見ました。

◇1～6節a;「多くの水の上に坐っている大淫婦」は、「地の王達は(皆)彼女と淫行をなし、地に住む者は彼女の淫行の葡萄酒に酔っぱらい」、天使は、ヨハネを「靈にて荒野に連れて行った」が、そこで大淫婦は「(神を)澆す名にて(全身を)蔽われた、七つの頭と十の角のある緋色の獸に乗っており」、「紫と緋の衣を着、金と宝石と真珠とて(身を)飾り、手に嫌悪むべきものと彼女の淫行の穢れとの一杯入った金の酒杯を持ち」、「奥義」と「大バビロン、淫婦らと地の嫌悪む

べきものとの母！」の名前が額にあり、「聖徒の(流した)血とイエスの証人達の血とに酔っぱらっている」との神の幻をヨハネは見ました。

◇1～6節a;大淫婦・バビロンは、「地の王達は(皆)彼女と淫行をなし」、「(神を)流す名にて(全身を)蔽われた、七つの頭と十の角のある緋色の獸に乗っており」、「額」には、「奥義」と「大バビロン、淫婦らと地の嫌悪むべきものとの母」という名を刻み、「地の王達と、聖徒の(流した)血とイエスの証人達の血とに酔っていた」と、記録されています。

⇒「大淫婦・バビロン」は、現実には、ローマ帝国をヨハネには連想させますが、本質的には、神を冒瀆しつづける「龍(悪魔・サタン)軍団」をさしています。

⇒「淫行」は、道徳的頽廃を描きますが、基本的には、政治的経済的結びつきを示します。「龍(悪魔・サタン)」は、常に、利得中心に働いているのです。

⇒「紫と緋色」は、権力の象徴であり、「金と宝石と真珠とて(身を)飾り」は、栄華を示します。

- ⇒「七つの頭と十の角のある緋色の獣に乗る」は、権力者としての威厳誇示であるとともに、「多くの水の上に坐っている・地の権力者に支持されて」、「龍(悪魔・サタン)の玉座」を確保している権力構造を示し、KK師がご指摘のように、「政治と文化」を完全に掌握していることを示しているのです。
- ⇒「大淫婦・大バビロン」は、別の権力者に嘗て滅ぼされたように滅ぼされますが、「奥義」、「地の嫌悪むべきものとの母」の2つの名を額に刻む不思議な魅惑によって、利得を求める人々を巻き込んで行きます。
- ⇒「奥義」は、人々を惑わす龍(悪魔・サタン)の不思議なわざを示し、「地の嫌悪むべきものとの母」は、「毒をもって毒を制す」の如く、龍(悪魔・サタン)が偶像礼拝を強制することによって全権を掌握する権力構造の表明です。
- ⇒バビロン王ネブカデネザルが、偶像礼拝を強要し、歴代のペルシャ王が、同じ方法を駆使、ユダヤ人やダニエル、3人の知恵ある若者を苦しめました。
- ⇒エステル記逆転劇は、影の真の王顕示です。

◆ローマ13章11～14節；パウロは、キリストを着るよう勧めました。

◇13:11～14；塚本訳◆日は近い、さめよ  
「11 しかも、あなた達は今の時代を、すなわちもはや眠りからさめるべき時であることを、よく知っている（のだから、なおさらのことである。）今は、信仰に入った時よりも、わたし達の救いが近づいているのである。

12 夜がふけて、（最後の）日が近づいた。  
だから闇の業をぬぎすて、光りの武具をつけようではないか。

13 昼間にふさわしく、きちんとして生活しようではないか、酒宴と酩酊でなく、淫樂と放蕩でなく、喧嘩と嫉妬でなく。

14 主イエス・キリストを着なさい。肉をいたわるのはよいが、情欲に陥らないように。」と、パウロは、世の終わり・終末を意識し、復活のいのち・主イエス・キリスト様を着るように勧めました。神の福音生活です。

◇11～13節；「日・世の終わりの日が近づいた」ので、「昼間の生活」、「闇の業をぬぎすて、光りの武具をつけよう」と、勧めます。

⇒KK師は、ご自身の著書「**伝道の神学**」や「**日本の伝道**」で、ドイツに始まった宗教改革は、当時のヨーロッパの状況から「**伝道**」ということを考えていなかつたと言われます。

⇒KK師はむしろ、マルチン・ルターによって、改革を求められていたローマ・カトリック教会の中の**イエズス会**が、伝道の必要を感じて、**海外へと宣教師を派遣**、日本にも、戦国時代に既に、宣教師が派遣されていたと言われます＜**ザヴィエルの派遣**＞。

⇒KK師は、キリスト教禁止令がとかれたのが明治6年で、私たちが所属しています新教、プロテスタント教会が日本に派遣されたのは、1859(安政7)年、江戸時代の末期で2009年が、宣教150年となることを2004年の著書で語っておられます。

⇒「**伝道**」は、父なる神と子なるイエス・キリスト様と聖霊なる神が、**罪とサタンからの救いを福音の恵みとして宣べ伝える**ために派遣されることです。**神の罪人への愛**が、派遣の動機であり、**信仰と希望**は、**神の愛**の中に生きることから生まれ、喜び・讃美を与えます。

## 結論；

- ◇神は、変わらない愛と思いやりの神です。
- ◇ヨハネの黙示録は、1章1節、「イエス・キリストの默示」で、神の御子イエス・キリスト様が、天使を通し(1)、長老・使徒 ヨハネに与えた「神の国到来の奥義」の默示で、ローマ皇帝ドミティアヌス(81～96)時代に記録と理解。
- ◇ヨハネ黙示録1章は、御子の再臨信仰と愛、2章～3章は、7つの教会への手紙、4～5章は、羔羊礼拝と大讃美、6～13章は、聖徒の戦い、天使と龍(悪魔・サタン)、獸との戦い、14章は、小羊への大讃美、神無視の人々への裁きと信仰者への忍耐の求め、15章は、金の怒りの鉢による神の裁き序曲、16章は、金の鉢の用意命令、腫物、血海、血水、太陽炎焼、獸の座の暗黒による裁き、ハルマゲドンでの龍(悪魔・サタン)、第1、第2の獸と主なる神との最終決戦、バビロンの滅亡預言です。
- ◇ヨハネの黙示録17章1～6節aも、第7の金の鉢の注ぎで、バビロン・大淫婦への神の裁きの理由描写で、大淫婦の神なき生活と地の権力者との結びつきが描かれる。

⇒ヨハネ黙示録17:1～6aは、「龍(悪魔・サタン)」、「獸・支配者」、「獸・偽預言者」の国「バビロン・大淫婦」が、「政治と文化」を掌握、利得を求める地の権力者と結びつき権力者の玉座に君臨する姿が描かれました。

⇒「多くの水・国民・民族の上に坐り」、「七つの頭と十の角のある緋色の獸に乗って」、「金と宝石と真珠とにて(身を)飾る」、「バビロン・大淫婦」は、神なき生活がいつまでもつづくかのような思いを抱かせます。

⇒現代の政治権力、経済力を背景に闇の世界を築く人間の力の誇示をする社会は、何時までもつづくように思わされ、時に、真摯に生きようとする人々を失望させます。

⇒一見意味のない選択の道、生き方のようですが、パウロは、「闇の業をぬぎすて、光りの武具をつけよう」、「主イエス・キリストを着なさい。肉をいたわるのはよいが、情欲に陥らないように」と、勧めてくれました。

⇒「主イエス・キリストを着なさい。肉をいたわるのはよいが、情欲に陥らないように」は、「神信仰」、「神礼拝」の基本に帰ることです。